

大学における課外活動と人間形成に関する研究 : FD部・クラブ活動の実践を通して

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 加澤 恒雄, 永田 博道 |
| 雑誌名 | 紀要 |
| 巻 | VOLN6 |
| ページ | 27-33 |
| 発行年 | 2014-03-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1345/00003363/ |

大学における課外活動と人間形成に関する研究
——FD部・クラブ活動の実践を通して——

大学教育論 (No. 150)

加澤 恒雄・永田 博道 共著

A Study concerning the Humanization of the Extra-curricular
Activities in Universities and Colleges
——Through the Practices of the Folk Dance Bu or Club——

Tsuneo KAZAWA & Hiromichi NAGATA

In this article we would like to consider about the effects and the roles of the club activities as extra-curricular activities. These extra-curricular activities include the Bu activities, Circle activities, Dou-Kou-Kai (or I-kou-kai) activities, and so on. Therefore, in this paper, we would like to consider about the educational values of the extra-curricular activities from view of point of our "Folk Dance (FD) Club" activities.

In addition, the contents of this paper contain the history, the kinds, the origin of the FD and also our folk dance club activities till now.

<Keywords>

Extra-curricular activities, FD: folk dance, the significance of FD activities, educational values, or, humanization of extra-curricular activities, human being and dancing, education of universities and colleges

緒言

筆者らは、自らの学生時代に、それぞれいくつかの部やクラブに所属——たとえば、FDクラブ、柔道部、相撲部や空手部、重量挙げ部など、——し、活動をしたが、さらに、大学教師の立場では、バドミントン部、自転車部、鼓道部、アイスホッケー部などの部長ないし顧問として、これまで指導・実践活動に携わってきた。

そこで、本稿では、長年に亘る教育実践の成果として、とくに、FD(folk dance,以下FDと略称)クラブ活動の実践を振り返って、FDの本質とは何か、いかなる活動を行ってきたか、さらには、どのような人間形成に役立った

のか、等々について、あらためて大学における部、クラブ活動の意義などについて考察し、今後の課題や展望に言及し、論述してみたい。

大学における人間形成と部活動ないしクラブ活動について考える手がかりとして、学校教育における「特別活動」を取り上げてみよう。学習指導要領における教育課程の「領域」の1つとして、「各教科」や「道徳」や「学校行事」などの他に「時間枠」と「特別活動」がある。この教科外の教育諸活動のうち、その主要な領域の1つとして、部活動ないしクラブ活動がある。学校における全教育活動は、児童、生徒の人間形成を指向するものである。特別活動としての部活動ないしクラブ活動は、人

人間形成の観点から言えば、授業形態の教育活動よりも、その「直接性」、「衝撃性」あるいは「濃縮性」の度合いにおいて、より強大である。

なぜなら特別活動は、教科学習活動と比べて、児童・生徒自身の興味、関心、ニーズ、選択ならびに決断において、彼ら自身の主体性と自主性に基づく活動の機会が多いからである。以上述べた学校教育活動における課外活動としての部活動ないしクラブ活動の意義や役割は、大学教育においても同様であり、共通しており、あらためて大学生の人間形成の面で重視されて然るべきである。

I. 社会人基礎力の育成と大学教育

I-1. 社会人基礎力とは何か

青年後期に位置付けられる大学生たちの発達課題の1つは、カレッジライフの全体を通じて、人間形成を行うことである。大学を卒業すれば、彼らは、いわゆる職業社会人として社会参加を開始する。その際、彼らは、社会人基礎力が要求されることになる。それでは社会人基礎力とは何か。

周知の通り、「社会人基礎力」を提唱したのは、経済産業省（cf. 経済産業省「社会人基礎力とは」平成18年2月）であるが、その背景には、社会ないし企業と学校ないし大学ならびに若者（生徒・学生）の三者の人間力あるいは社会人力の捉え方にズレ、ギャップがあり、それが原因で、早期離職・転職などの問題が生じていることがある。そこで提唱されたのが、三者の「共通言語としての社会人基礎力」という概念である。ただし、社会人基礎力は、単に採用、就職活動においてのみ必要というわけではなく、社会生活のあらゆる場で、それは重要な能力なのである。

具体的に言えば、社会人基礎力には、以下の3つの能力と、12の能力要素が含まれている。すなわち、1) 考え抜く力、2) 前に踏み出す力、それから3) チームで働く力の3つの能力があり、それぞれ、1)には計画力、課題発見力、想像力が、2)には働きかけ力、主体性、実行力が、それから、3)には発信力、傾聴力、柔軟性、規律性、情報把握力、ストレスコントロール力という12の能力要素が含まれている。

I-2. 大学教育と部活動

ところで、大学におけるクラブ活動や部活は、学年を超えた異年齢集団としての活動であり、学生が自らの興味・関心に基づいて、自由意思によって自発的に選択したそれぞれの「クラブ」や「部」に所属して、主体的に

行う教科外学習活動であり、教科の学習・学問の修得活動とは本質的に異なる活動であり、それらの活動では達成しえない側面の人間形成に資するのである。換言すれば、学生にとって、クラブ活動ないし部活動は、職業社会人として要求される社会人基礎力を身に付ける貴重な機会となりうるのである。

II. われわれのFDクラブ活動の目的と意義

II-1. FDクラブ活動の目的

- 1) 団体生活をすることにより、自立と協力と切磋琢磨の精神を養う。
- 2) いかなる難題にぶつかろうとも、不屈の精神を養い、人格形成をめざすこと。
- 3) FDクラブであるがゆえに、FDを踊ることが第一義的な目的である。

II-2. FDクラブの実践活動によって修得されるものないしはその意義とは何か

FDを踊ることによって、どのような効用ないしメリットがあるのか、また、その意義を認識しておかなければならない。すなわち、

- 1) 対人関係を良好にし、誰とでも踊ることができて他者と楽しく話しができるようになる。
- 2) 緒外国のFDのバックグラウンドを研究し、その時代にどんな気持ちでFDを踊っていたかを知ることができるので、外国理解の一助となり、国際性の涵養に資する。
- 3) 街のサークル等とはいろいろ違う、ということを理解することができる。等々である。

II-3. FDクラブの主な年間活動

年間のFDクラブ活動として、その主要なものを挙げれば、以下の通りである。

- 1) 新入生勧誘 2) 新入生歓迎コンパ 3) 新入生歓迎ハイキング 4) 毎週土曜日の練習会 5) 新入生歓迎パーティ、関学連の新入生歓迎パーティに参加 6) 夏期合宿（一週間） 7) 創立パーティ、クリスマスパーティ、送別パーティ、（関学連）創立パーティに参加 8) 役員改選 9) 春季合宿（一週間） 10) FDの原書、発掘等 11) FD民間企業のFD（リクレーション）指導 12) 学園祭での踊りの指導と、デモンストレーション 13) 合宿等での各地の民謡の修得 14) 大学間での各様のデモンストレーションに参加、等々である。

II-4. 部活のリーダーの役割と心得

部・クラブ・サークルのリーダーの一般的な役割と心得について、部長経験を踏まえて箇条書きで列挙すれば、次のようになる。

1) まず、リーダーの役割としては、

- ①クラブの方針決定をする。
- ②クラブの構成員としての資格を持つ一人である（3年生中心となる）。
- ③すべてを教え、修得した時点で、よりよいステップに進ませること。選挙を行いリーダーを決める際、リーダーは、他の部員から尊敬される立派な人格を必要とする。
- ④愛情、円熟、熱心、創造力、知恵などを要求されるリーダーは、自分自身を常に磨く求道者ないし修養者でなければならない。
- ⑤アイデアを確実に実行に移し、直面する問題に対し、新しい方法を見出す努力を要求される。
- ⑥部員を継続的に進歩向上させる新しい発見に努めること、等々である。

2) 次に、リーダーの心得としては、

- ①過去から学び、重要な材料である記録を取ること。
- ②問題を系統化してわかりやすく解決すること。
- ③目標を明確にすること。
- ④意思の疎通をはかること。
- ⑤常に新しいリーダーづくりに精進すること。
- ⑥責任の限界を明確にすること。
- ⑦構成員の一人ひとりに仕事や役割を与えること。
- ⑧幅広い知識と教養を身に付け、常に視野を広げる努力をすること。
- ⑨正しい判断力を養うこと、等々である。

III. FDの歴史的経過

III-1. わが国のFDの歴史

ここで、日本のFDの歴史的経過について、やや詳細に述べてみよう。

昭和21年：W. P. ニブロ氏が、長崎でスケアダンス(SD)を紹介。

昭和23年：北海道にも広め、日本南北から中央にまで広め、全国的にSDが普及する。東京で50万人、全国で230万人のダンス人口（当時の文部省調べ）。

昭和24年：文部省主催の第一回SD講習会が開かれる。

昭和25年：民間のサークルが多数生まれる。この年の3

月に、第1回のSD講習会が開かれる。

昭和26年：J. & L. キースリー氏夫妻が来日し、ゲストフィンガーを中心に、SD（カリフォルニアを中心とするウエスタンスタイルのもの）を多数紹介。

昭和27年：E. R. バックリー氏がYMCAを訪れて、社会教育的な面を強調するため、FDを含めてSDと呼称した。

昭和31年4月：RECの特別使節として、マイケル・ハーマン一行を迎え、FD界は再び息を吹き返す。その際、FDは高度なテクニックを必要とした。日本人は、それを活用することができなかった。「ハーマン講習会」は都内3ヶ所で、3日間にわたって行われたが、ツーステップ、(ワルツターン)のできる者は、全体の5分の1以下であった。

マイム、マイムを踊れる人は、10人しかいなかった。「さよならパーティ」には、二晩とも2,000人ずつ合計4,000人が集まったとされる（朝日新聞調べ）。

ハーマン一行は全国を巡回したので、再びFDも盛り上がってきた。

昭和31年8月：北海道の札幌で、第1回「全日本FD大会」が開催された。

昭和31年10月：「東北地区学生FD連合」を結成した（当連合のメンバーたちもハーマン氏の影響をうけている）。

昭和31年10月：第1回創立パーティ（「学連」の講習会、研究会が中心）。ハーマン氏の影響あり。

昭和31年10月：「関学連」（学習院大学、東京教育大学、日本女子体育大短期大学、日本体育大学、横浜国立大学など）ができる。

昭和31年11月：スウェーデン人のカール・スチュアート氏来日する。

「赤石FD研究会」を中心にスウェーデンのFDを紹介され、スウェーデッシュ・ハンボを正確に指導された。

昭和32年8月：第1回「全国FD札幌大会」、第2回「全日本FD東京大会」が開催された。「学連」も前夜祭を主催した。

昭和34年8月：第1回「全日本学生FD大会」を開催（東京教育大学の幡ヶ谷体育館）し、連盟結成の足がかりとなった。「全日本学生FD」が発足

した。しかしながら、その後、社会人の「全日本FD連盟」が発足する頃から、急速に我が国のFDは下火となる。社会状態の変化か？つまり、一般社会の教育や、同好団体の事情の変化なのだろうか。

FDが衰退していった原因の主なものと言えば、素朴なFDには無い踊りであるモンキーダンスとか、ツイストとか、若者は、当時リズム系の方へ走っていったことが挙げられよう。外国の踊りは、大学のサークルとか、一部の民間のサークルで、SD（スクエアダンス）等が盛んに踊られたというものでなく、現在は、AKB48あるいはヒップポップダンス等、形を変えて出現しているようでもある。

爆発的なものはないが、今でも大学等でリーダーであった人か、または、OBの人たちを中心に、細々ではあるが、FD大会や合宿などを開催している。墨田区では年に一回体育館を利用してFD大会などもある、それからまた、OBらによる「全日本FD大会」も、全国の各地区で開催されている。なお、多くの大学のFDクラブ・部も部員確保が難しく、いくつかの大学は廃部になっているところもある（「全日本学生FD連盟OB・OG会」からの聴き取りによる）。

Ⅲ-2. 諸外国におけるFDの現状

海外におけるいくつかの国のFDの状況について、ごく簡略に述べておこう。

①アメリカ

FDを楽しみ・娯楽に重点をおいている。ミキサーやプレイパーティなど大人数で踊る一般的なFDをはじめ、ニューイングランド地方の和やかな雰囲気と、ジョークが飛び交う中で踊るコントラ・ダンス、多数の踊りのスクエアダンス、どちらかという年齢をとれば楽しめるのは、大衆文化の盛んなアメリカならではといえる。SDは、学校でもその導入を考えているもっともポピュラーな踊りであり、母国への想いから生まれたもので、そのFDグループも形成されている。現在でも、SDの普及や研究に熱心な団体が数多く存在している。

②メキシコ

スペイン支配の長かったメキシコは、土着の文明と外国の文明が交じり合った、個性の強い文化でできている。古代のマヤ、アステック王国より引き継がれる素朴で力強さを感じる踊りや、曲が情熱的なスペインのものと融合し、世界でも有数な踊りが、文化を築き上げている。

③イギリス

島国であること、有史以来、常にリーダーシップ的存在である。世界の政治経済を牽引してきた自信のあらわれ、文化への自負は強く、文化の保存や研究熱心な国は他にない。イングランドとスコティッシュの特色で2分できるが、カントリー・ダンス、モリス・ダンス、ソード・ダンスの3種類の踊りには、代表的デモンストレーションの要素が強く、研究対象が主。スコットランドでは、タータンチェックの衣装をまとうて踊るハイランド・ダンスが有名。踊って楽しむより見せるための踊りで、子どもの頃から厳しい訓練が必要になる。

④フランス

FD愛好家が少ない国であるが、バレエが盛んであり、庶民性の強いFDは、嗜好があらわれる。レジャーとしては重宝されている。ブルタニュー：ブローバンス地方ではポピュラーなものとして親しまれている。

⑤ドイツ

抑揚のないワルツのようなレントラーやラインダンスなど、カップル・ダンスが主流である。

職業に関するギルド・ダンスが盛んである。たとえば、鍛冶屋の踊りや、炭鉱夫の踊りや、靴屋の踊りなど、仕事ぶりを表す踊りなどがある。

⑥イスラエル

国際規模のFDフェスティバルが毎年開催されている。FDが全国民に親しまれている。イスラエルのFDは、マイム、マイムが日本の学校教育にも取り入れられているように、イスラエルのFDは、日本でもポピュラーである。民族としての文化の独自性があまり残されていない。ユダヤ人には伝統的な踊りがあったことは、聖書にも記されているが、その踊りは受け継がれていない。ルーマニアのホラーやポーランドのクヤピヤク、リストニアのボルカなど、世界各地の影響であると考えられる。

⑦フィンランド

北欧などのFDが盛んで、夏至の頃の白夜となると、夜通しダンスを踊る地域もある。シューティッシュやボルカ、マズルカのようなヨーロッパ共通のステップを主としたスウェーデンのハンボのような淡々とした曲調で、しっとりとした踊りも多い。

⑧スイス

デモンストレーションにうまくFDを取り入れている国でもあるドイツやオーストラリアの影響が強い。物まねやふざけたゼスチャー、アドリブを取り入れた踊りは、自分で踊っても人が踊っているのを見ても楽しめる。

⑨ロシア

ロシアは共産主義のもとで、国家を挙げての芸術や文化的行動を手厚い保護の下に行ってきた。FDに対しても手厚い保護があり、他の国と比べても、レベルが高い学校でのクラブ活動からフォーク、バレエまでと、広く踊って楽しみ、見て楽しむといった構図である。ダンス先進国ならではの強みがあり、スピードが速く、細かなステップのFDが多い。

⑩ギリシア

節の長い東洋調の象徴を帯びた曲の流れに乗って、身振り足振りで指を鳴らして踊る各種の輪舞は、ギリシア人の長い歴史を秘めた快さと哀れさと混合した、一種の素朴なムードを醸し出す。

IV. FDの種類

IV-1. FDの種類

ところで、FDとは何かについて、ここで簡単に説明しておきたい。FDとは、人類が原始的な生活を行っていた頃からの「踊り」に、そのルーツを求めることができる。「踊り」は、個人の主張や他者とのコミュニケーションをはかる手段の一つとして、大昔からすでに存在していたといわれている。人が「踊る」ということは、それほどプリミティブな行動であり、同時に「踊り」が象徴するものは、現状の複雑で多様な世界とはかけ離れた、きわめて素朴で自然なものであり、動作は各民族の土着的な文化と共に、FDのフィギュアという形で残され、踊り継がれているのである。

A) FDの起源による分類

FDの題材を分類すると、おおよそ以下ようになる。

- ①動物踊り：熊、馬、山羊、牛、羊、狼、猫などである。
- ②儀式踊り：結婚式、葬式、祝祭、宗教行事などである。
- ③労働踊り：木こり、靴屋、鍛冶屋、羊飼、農家などである。
- ④求愛踊り：指振り、マフラー振り、ハンカチ振りなどである。
- ⑤戦闘踊り：刀、ゲリラ、傭兵などである。

B) 現在、確立されているFDの種類

まず第1は、カントリー・ダンスで、その地方の祭典、伝説に基づき、自然に発生したダンスであり、まだ全国的には普及していない踊りである。

第2は、ナショナル・ダンスで、これも地方で起こっ

た踊りであるが、地方的な流行を超えて、全国的に広まったものであり、イタリアのタランティラ、セルビアのコローなどがそれである。

第3は、インターナショナル・ダンスで、最初は地方で踊られたものであるが、徐々に全国的に広まり、現在は全世界の人々に愛好されているものである。たとえば、ホルカ、ショーテッシュ、ギャロップ等がこれに属する。

第4は、キャラクター・ダンスで、各国特有の特徴をあらわすために、その地方特有の音楽、楽器を用い、また、衣装、持物、メイキャップ、およびその地方のステップを取り入れた踊りである。たとえば、スペインでは、この気分を出すために、女性は扇のついたショールをつけ、カスタネットを打ちならし、ハバネスク・ステップを踏む等である。

第5は、コンポーズ・ダンスで、この踊りは、地理的分類とあまり関係はないが、曲目に人々が踊りを振付けて組み合わせできた踊りである。たとえば、イギリスの宮廷舞踏や、最初のアメリカのラウンド・ダンスなどがそうである。

第6は、ランド・ダンスで、本格的な男女一組のカップル・ダンスでありながら、FD感覚で踊れるのがランド・ダンスである。基本のステップは、社交ダンスと共通ですが、動きの指示に合わせることで、楽しく気持ちよくダンスに集中できる。

第7は、スクエアダンスで、8人が1セットで踊るもので、アメリカ合衆国で生まれた。このダンスは、イギリスのカントリー・ダンスやフランスの宮廷舞踏などを起源とし、開拓者によって形を変えて生まれたものである。時代と共にだんだんと変化して、現在も踊られているものは、第二次世界大戦後に発達したモダン・スクエア・ダンスと言われるものであり、世界中で爆発的な人気になって踊られている。

そして、第8は、リクリエーション・ダンスで、ポップスから演歌まで多彩なジャンルの曲に合わせて踊る。これはさまざまなダンスの動きを取り入れた振り付けが特徴である。誰もが楽しく踊ることができ、仲間づくりや健康づくりに最高である。子どもたちに人気のある曲でも踊れるので、学校教育へのダンス導入にも向いている。

IV-2. FD踊りの例：HOPAK(ロシア)

ここで、ロシアの代表的なFDの一例を挙げて説明してみよう。

- 1) 体型：パートナーとバルソビナポジションに向く。

この踊りは、前奏がなくエネルギッシュである。

2) 踊り方:

- ① バドバスク・ステップで LOD に進む(左足より)。3 2 呼間
- ② タッチエクマテンド・ステップで LOD に左足より進む。3 2 呼間
- ③ ロシアンボルカ・ステップ 1 6 回で前進する。3 2 呼間
- ④ パートナーと向き合い、バズ・ステップで右回り、スタンプ(右・左・右) 女子は、そのまま右回り、男子は、今度左回りにバズ・ステップを行う。3 2 呼間
- ⑤ フォーリング・ステップを左足より左右各 4 回バルソピナ・ポジションのまま行う。
- ⑥ ハンガリア・ターン・ポジションで、バズステップを右回りスタンプ。次いで左回り。3 2 呼間
- ⑦ バルソピナ・ポジションでタッチエクマテンド・ステップを 1 6 呼間
- ⑧ 左手を離し、男子は女子をスピンさせながら、ロシアンボルカで前進する。1 6 呼間
- ⑨ 再びバルソピナ・ポジションとなり、女子を 2 回転させ、その間、男子はその場でロシアン・ボルカ・ステップを踏む(両手は交互にして取る)。
- ⑩ 男子が円外向きで男女向き合い、自分の右方向へブッシュ・ステップ 1 4 回、次にスタンプ(1 5 と 1 6)。
- ⑪ 女子はブッシュステップで元の位置に戻る。1 6 呼間
- ⑫ 男女向き合い、手を水平に、肩の高さにし、右足をトウポイントにする。イ) 両手を頭上で合せ、足はヒールポイントにする。ロ) もう一度手を水平にし、足は左足にクローズして、トウポイントとする。ハ) その足を斜め前に振り出し、その足の下で両手を合わせる。ニ) 足を変えて左から行う。以上をもう一度繰り返す(女子の動作は省略する)。1 6 呼間
- ⑬ ⑫が終わると同時に、男子は両足を開き、かかとで立つ。手は肩の高さで水平とする。イ) 次に、両足をそろえて膝を曲げ、手を胸の前で交差する。ロ) 以上を 8 回行う。1 6 呼間
- ⑭ 男子は腕を交差して組み、しゃがんで足を交互に前に出すバンドキックを左右 8 回ずつ行う。1 6 呼間

結 語

以上述べたように、踊りの原点は FD (民族の踊り) であり、現在は、リズム・ダンス等に幾通りにも発展を遂げており、本来の FD そのものは、それほど盛んではない。日本では、たとえば、「炭坑節」、「江刺甚句」、「佐渡おけさ」、「花笠踊り」や「黒田節」あるいは「大漁唄い込み」など、民謡踊りそのものが FD であり、形を変えている。また、社交ダンスも FD のルーツとして分岐し、成長を遂げた。現在は、小学校の英語教育や高校の選択必修科目として、ダンスも学校教育の中に導入されている。それでは FD を学ぶことにより、われわれは、何を期待することができるのだろうか。民族の歴史を知ることにより、時代背景、経済や文化その他いろいろなものを検証することができるのである。

古里には古里の踊りがあり、長い年月を経て生き抜いており、周知の通り、それらは民謡踊りなのである。たとえば、「ソーラン節」がソーラン調にアレンジされ、伸び伸びとしたリズムを持った踊りとして育まれている。リズムも個性的であり、その時代と融合して成長しているものと思われる。FD は、民謡踊りとして親しまれ、永続的に何らかの形で感情を持ち続ける踊りであると言える。FD ないし、民謡踊りを媒介として、われわれは、この醍醐味を絶賛し続けるであろう。FD は不滅であり、その時代、時代に形を変えながらも、人々を楽しませ、社会貢献していると言っても過言ではないのである。

たとえば、東京都台東区浅草で、2013 年 8 月 31 日の「浅草サンバ・カーニバル」では、踊り手のチームが華麗さを競い合った。150 人以上の大型チームが争う S1 チームでは、関東地区の大学生でつくる「ウニアン・ドス・アマドーリス」チームが、8 度目の優勝を果たした。サンバ・カーニバルは、小学生などが出場するコミュニケーションリーグや、協賛企業のチーム、比較的小規模の S2 リーグと大規模な S1 リーグに分けられる。S1 と S2 は、それぞれが設定したテーマに沿った表現力や、ダンスの躍動感、それから衣装の華麗さなどを競った。

第 1 回から連続出場を続ける「ウニアン」メンバーで早大生の丸橋俊介さん(22)は、「地球の反対側の音楽でこうしてみんなが一つになれるのは本当に不思議だけど、それがサンバの魅力。社会人になっても続けていきたい。」と目を輝かせていた。32 回目の今年度は、26 チーム約 4700 人が参加し、迫力ある踊りを披露した。最高気温が 35 度を超える猛暑日の中、きらびやかな衣装を身にまと

ったダンサーたちは、趣向を凝らしたアレゴリア(山車)とともに、元気に練り歩いた。沿道には、50万人(主催者発表)が訪れ、華やかさを楽しんだ。北区から初めて見に来たある会社員は、「踊っている人たちがすごく楽しそうで、こちらまでうれしくなった。」と笑顔で話した(東京新聞2013年9月1日(日))。さらにまた、周知のとおり、高円寺では阿波踊り、土佐ではアレンジしたソーラン節等、FDが蘇っているが、これらは10年前にはごく少数の人たちが参加する踊りであったのである。

ところで、一般的には、リクリエーションとしてのFDという捉え方もある。がしかし、現役の大学生が、少なくとも大学のFD部・クラブとしては、そうした捉え方を否定する。なぜならFDを産み出したのは個別の民族であり、受け継いだのも個別の民族であり、それを感知することができるのは、正にその民族の心を理解した人のみである、と考えるからである。つまり、踊ることそれ自体はFDではなく、大学のクラブ活動では、他民族のFDをあくまで日本人の心で受け止めて、表現することなのである。その意味において、クラブ活動は、大学における教育活動の一環なのである。学生が、対社会的に主体的な態度でもって実践活動をするところこそ、現状を打破する具体的な方法を産み出す原動力となるのである。

最後に、FDに関する最新の情報について、若干付言するならば、全国会員10万人とも言われる「公益社団法人日本フォークダンス連盟」が誕生している。従来、FDには優劣の順位はなかったが、同連盟では技術の進歩状況で資格制度を設け、4級～1級の公認指導者資格制度を設けている。検定試験などを経て、FDの指導者として活動ができる。その他にも趣旨に賛同いただける方への会員制度や、各ダンスのテキスト、CD、DVD、資料の製作ならびに販売の普及や、また、出版事業も行っている。講習会では誰でも気軽に参加することができるように、また、指導者育成を行っている。

その他では、「全日本学生フォークダンス連盟」や「全日本フォークダンスOB・OG会」それから、「日本SD協会」など全国組織が結成されている。今年は、「全日本

学生OB・OG会」の21回大会が開催される予定である。現役の大学生によるデモンストレーションも予定されている。大会会場は、「国立オリンピック記念青少年総合センター」スポーツ棟第3体育館(東京都渋谷区代々木神園町3-1)、大会期日は、平成25年10月20日が予定されている。そして、大人の参加費は、1500円であるが、現役学生は無料となっている。また、平成32年の東京オリンピック開催も決まり、今後は、FDも大いに発展するであろう。

文 献

- 河野英太郎『99%の人がしていないたった1%のリーダーのコツ』ディスカヴァー・トゥエンティワン、平成25年
- 原 衛編訳、中守孝太郎(翻訳協力)『スクエアダンス入門』日本フォークダンス連盟、日本スクエアダンス協会発行、平成23年
- 日本フォークダンス連盟『スクエアダンス・コール入門1』日本フォークダンス連盟発行、平成23年
- 加澤恒雄『教育人間学的視座から見た特別活動と人間形成の研究——新しい教育学への試み——』大学教育出版、平成21年
- マックスデブリ・著 依田卓己・訳『響き合うリーダーシップ』萩原出版、平成21年。
- 加澤恒雄「特別活動における部活動の教育人間学的考察」『広島工業大学研究紀要』第42巻第1号、平成20年
- 日本フォークダンス連盟監修、エディッシュ企画編集、今井邦子編集協力『CD付すぐに踊れるフォークダンス』成美堂出版、平成12年
- 城山三郎『人を育てる』光文社、平成12年
- 亜細亜大学FDC、武蔵野女子大FDC『Free time』第5号、平井プリント社、昭和45年
- 亜細亜大学FDC、武蔵野女子大FDC『FD合同合宿テキスト 昭和45年度版』平井プリント社、昭和45年
- 関東学生FD連盟FD21『創立10周年記念号』中央大学学友会FD研究会、昭和41年
- 中央大学FD研究会『白踊』第2号、中央大学生協出版局、昭和38年